

小樽市の漁業 (平成30年版)



ホタテの籠上げのようす

目 次

1	漁業の概要	1
2	小樽市の漁港	2
3	漁業権区域	3
	（1）漁業権の定義	4
4	漁業生産状況	5
	（1）漁獲量及び漁獲金額等の状況	5
	（2）主な漁業種類の生産状況	8
	1）沖合底びき漁業	8
	2）サケ定置網漁業	8
	3）ニシン刺し網漁業	9
	4）ホタテ養殖漁業	10
	5）ナマコ漁業	11
	6）シャコ漁業	12
	7）採介藻漁業	13
5	漁業協同組合概要	14
	（1）漁協組合員数	15
	（2）漁船隻数	16
	（3）漁業種類別経営体数	17
	（4）漁獲金額別経営体数	18
	（5）年齢別漁業就業者数	19
	（6）安全操業対策	20

1 漁業の概要

小樽市は、北海道の日本海側中央部に位置し、68.62km（銭函～蘭島）の海岸線を有しています。海岸の形状も、砂地海岸や岩礁地帯、転石海岸と変化に富んでおり、魚介類の種類も多く、小樽で漁獲される魚介類は約 40 種類で、平成 30 年の漁獲量は約 1.5 万トン、漁獲金額は 37.1 億円となっています。

小樽の沿岸漁業は、江戸時代から行われたニシン漁を主体に栄えてきましたが、昭和 29 年の群来を境にそのニシンが衰退し、その後刺網・エビ簞・沖合底びき・延縄等の漁船漁業を主体に発展してきました。

昭和 52 年に 200 海里水域が設定され国際漁業規制が年々強化されることにもない、沖合底びき漁業の縮小を余儀なくされ、その後、採介藻漁業・ホタテ養殖漁業に力を注ぎ現在に至っています。

近年では水産資源の減少から、つくり育てる漁業・資源管理型漁業を推進し、ニシン、ヒラメ、サケ、マスの稚魚、アワビ、ウニの種苗の放流やナマコの増養殖事業、藻場の磯焼け対策などに取り組んでいます。

ニシンについては、平成 15 年から稚魚の放流を続け、平成 21 年に漁獲量が急増したことから、放流の成果であると考えられ、ナマコの種苗生産については、これまでの試験・研究の結果を生かした、本格的な種苗生産の実施を目指しています。

また、藻場の磯焼け対策として、ウニの移植やモニタリング調査を実施し藻場の保全に努め、コンブなどの生物量の増加が確認されています。

小樽で水揚げされる水産物は、卸売市場で「せり」にかけられ、仲卸売業者を通して小売店に届けられます。

本市には、「小樽市公設水産地方卸売市場」と「小樽市漁業協同組合地方卸売市場」の 2 つの地方卸売市場があります。平成 30 年は約 44.2 億円（地元 35.2 億円、移入 9.0 億円）の取扱いとなっています。

2 小樽市の漁港

小樽市には、第1種漁港として祝津、塩谷、忍路の3漁港があり、重要港湾である小樽港に高島漁港区があります。また、銭函、張碓、朝里、船浜、文庫歌、桃内、蘭島に船揚場があります。(図-1)

祝津漁港(副港)は、許可を受けたディンギーヨットの使用が可能となっています。



図-1 小樽市の漁港等位置

※) 漁港の種類

- 第1種漁港 : その利用範囲が地元の漁船を主とするもの
- 第2種漁港 : その利用範囲が第1種漁港よりも広く、第3種漁港に属しないもの
- 第3種漁港 : その利用範囲が全国的なもの
- 第4種漁港 : 離島その他辺地にあつて漁場の開発又は漁船の避難上特に必要なもの
- 特定第3種漁港 : 第3種漁港のうち水産業の振興上特に重要であるとして政令で定めるもの

○祝津漁港(第1種漁港 昭和26年10月17日指定)

- 管理者 : 北海道(昭和30年4月14日告示)
- 主な漁業 : ホタテ養殖、刺し網、定置、タコ縄、ウニ・アワビなどの採介藻漁業
- 水揚量 : 2,532トン(平成30年データ)
- 水揚金額 : 9.3億円(平成30年データ)
- 登録漁船数 : 51隻(平成29年データ)
- PB許可隻数 : 164隻(平成30年許可隻数)

※工事予定の関係で、再申請許可により延べ数(前年は76隻)

○塩谷漁港(第1種漁港 昭和27年10月6日指定)

- 管理者 : 北海道(昭和30年4月14日告示)
- 主な漁業 : 刺し網、定置、タコ縄、ウニ・アワビなどの採介藻漁業
- 水揚量 : 170トン(平成30年データ)
- 水揚金額 : 1.6億円(平成30年データ)
- 登録漁船数 : 46隻(平成29年データ)

○忍路漁港(第1種漁港 昭和26年10月17日指定)

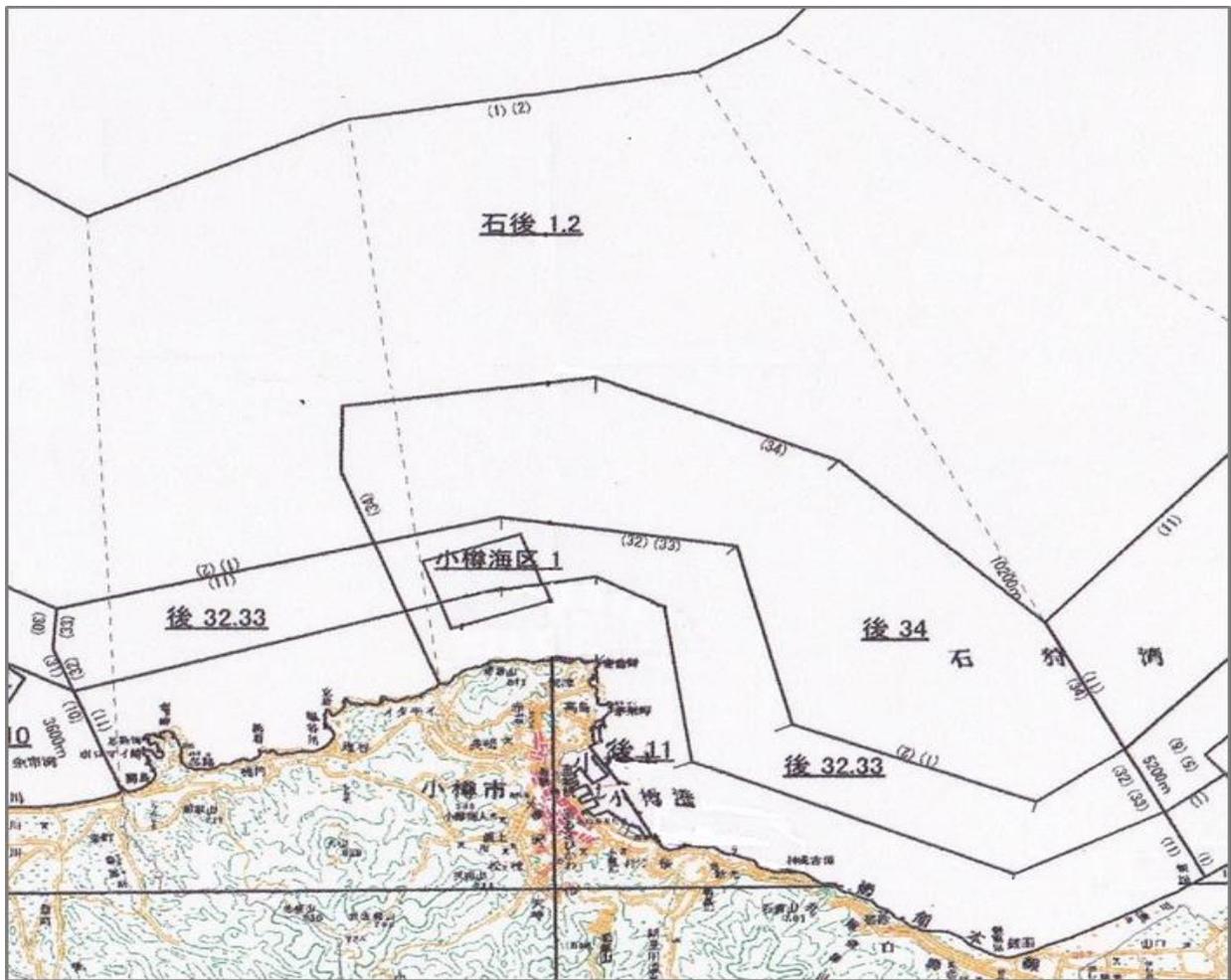
- 管理者 : 北海道(昭和30年4月14日告示)
- 主な漁業 : 刺し網、定置、タコ縄、ウニ・アワビなどの採介藻漁業
- 水揚量 : 363トン(平成30年データ)

水揚金額 : 2.5 億円 (平成 30 年データ)

登録漁船数 : 79 隻 (平成 29 年データ)

3 漁業権区域

区分	漁業権許可番号	漁業権の種類
単有	後海共	11 第1種共同漁業権 (タコ及びビシャコを除く)
		32 第1種共同漁業権 (タコ)
		34 第1種共同漁業権 (シャコ)
		33 第2種・第3種共同漁業権 (第3種つきいそを除く)
共有	石後海共	1 第1種共同漁業権 (タコ)
		2 第2種共同漁業権
区画	小樽海区	1 第1種区画漁業 (ホタテガイ養殖業)



(1) 漁業権の定義・・・漁業法より

「漁業権」とは、定置漁業権、区画漁業権及び共同漁業権をいう。

- 「定置漁業権」とは、定置漁業を営む権利。

「定置漁業」とは、漁具を定置して営む漁業

- 「区画漁業権」とは、区画漁業を営む権利。

「区画漁業」とは、一定の区域内において営む養殖業

- 「共同漁業権」とは、共同漁業を営む権利をいう。

「共同漁業」とは、一定の水面を共同に利用して営む漁業

第一種共同漁業 藻類、貝類又は農林水産大臣の指定する定着性の水産動物を目的とする漁業

第二種共同漁業 網漁具（えりやな類を含む。）を移動しないように敷設して営む漁業であって定置漁業及び第五種共同漁業に掲げるもの以外のもの

第三種共同漁業 地びき網漁業、地こぎ網漁業、船びき網漁業（動力漁船を使用するものを除く。）、飼付漁業又はつきいそ漁業（第一種共同漁業に掲げるものを除く。）であって、第五種共同漁業に掲げるもの以外のもの

第四種共同漁業 寄魚漁業又は鳥付こぎ釣漁業であって、第五種共同漁業以外のもの

第五種共同漁業 内水面（農林水産大臣の指定する湖沼を除く。）又は農林水産大臣の指定する湖沼に準ずる海面において営む漁業であって第一種共同漁業に掲げるもの以外のもの

4 漁業生産状況

(1) 漁獲量及び漁獲金額等の状況

直近6年間における小樽市の漁業生産高は平成25年の2.2万トンから、平成27年には1万トンに急減しましたが、平成28年から増加傾向になり平成30年は1.5万トンとなっています。

漁獲金額は多少増減の波がありますが、近年は増加傾向で推移しています。(図-2)

一方、全道をみますと、漁獲量では平成25年の123.9万トンから減少傾向にあり、平成29年は85.4万トンまで落ち込みましたが、平成30年は、ホタテやサンマなどが回復傾向、イワシの好漁が続いたことなどから3年ぶりに100万トンを超え102万トンとなっています。

漁獲金額では漁獲量に反して平成27年まで増加傾向でしたが、平成28年から減少に転じています。平成30年はイワシなどが魚価安のため前年を下回りました。

(図-3)

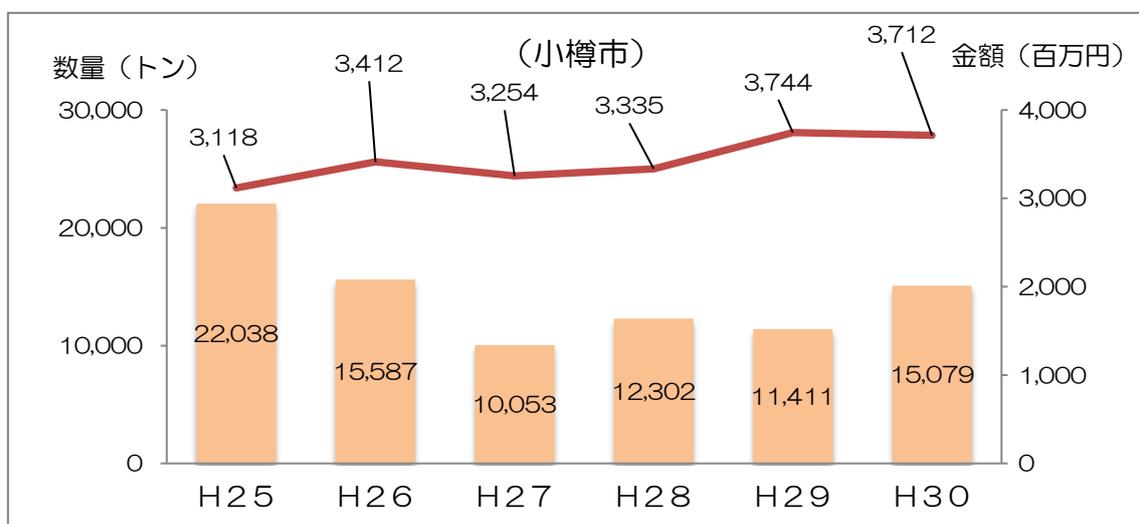


図-2 小樽市の漁業生産高の推移【直近6年間】

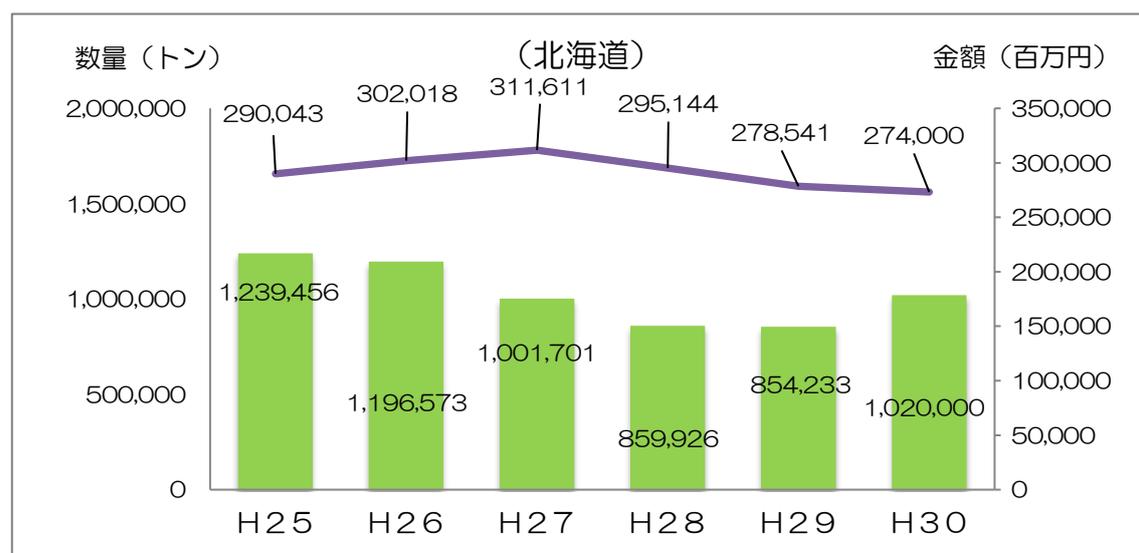


図-3 北海道の漁業生産高の推移【直近6年間】

(資料：小樽市統計書、北海道水産現勢概報)

平成 30 年の漁業種別取扱金額の上位をみますと、小樽市漁協では前年に引き続き安定したほたてがい養殖業漁業が、沖合底びき網漁業、うに漁業を抑えて 1 位になっています。(表一)

また、小樽機船漁協では沖合底びき網漁業が、数量で 5,056 トン、金額で 6.7 億円となっており、いかつり漁業は、数量で 1 トン、金額で 1 百万円となっています。(表二)

漁業種類		数量(トン)	金額(百万円)
① 区画	ほたてがい養殖業漁業	2,152	681
② 大臣許可	沖合底びき網漁業	2,590	368
③ 共同	うに漁業	17	313
④ 共同	たこ箱漁業	341	219
⑤ 知事許可	ずわいかにかご漁業	639	140
⑥ 共同	しゃこ漁業	65	136
⑦ 共同	にしん刺し網漁業	438	125
⑧ 共同	なまこ漁業	20	97
⑨ 定置	さけ定置網漁業	139	79
⑩ 共同	たこ縄漁業	148	75

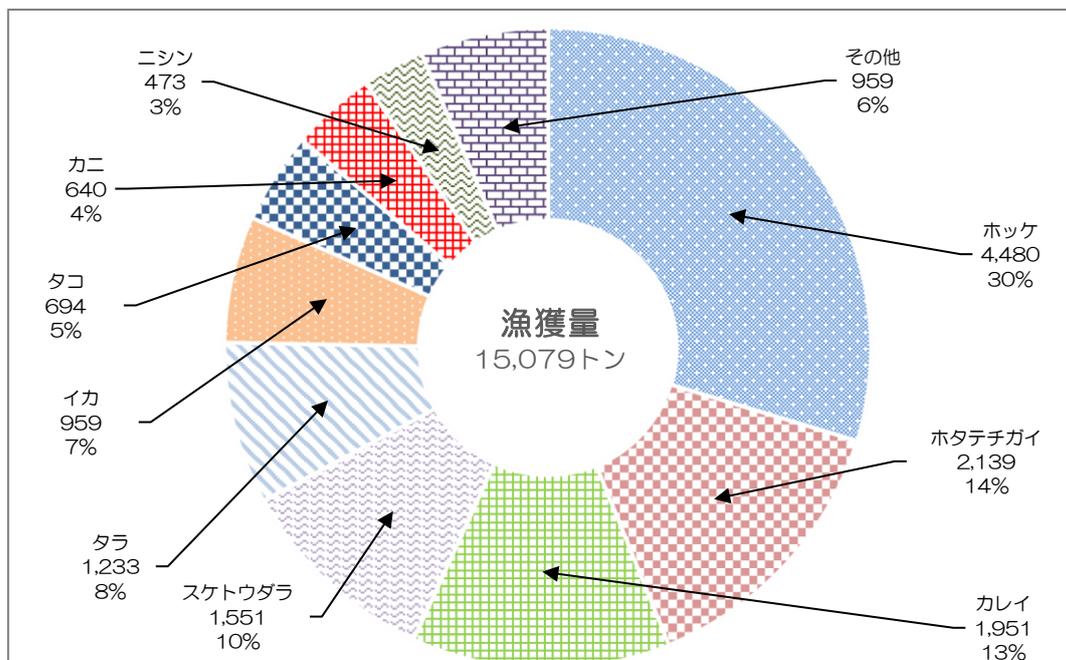
表一 平成 30 年の金額上位の生産高 (資料：小樽市漁協業務報告書)

漁業種類		数量(トン)	金額(百万円)
① 大臣許可	沖合底びき網漁業	5,056	674
② 知事許可	いかつり漁業	1	1

表二 平成 30 年の金額上位の生産高 (資料：小樽機船漁協業務報告書)

平成 30 年の魚種別漁獲量では、ホッケが全体の 30% を占め、ホタテ稚貝、カレイ、スケトウダラがほぼ同割で 37%、タラ、イカ、タコ、カニ、ニシン及びその他で 33% を占めています。(図一)

また、漁種別漁獲金額ではホタテ稚貝、イカがほぼ同割りで全体の 33% を占め、タコが 11%、ウニ、タラ、ホッケ、カレイがほぼ同割りで 29%、スケトウダラ、カニ及びその他で 27% を占めています。(図二)



図一 平成 30 年の魚種別漁獲量 (資料：小樽市統計書)

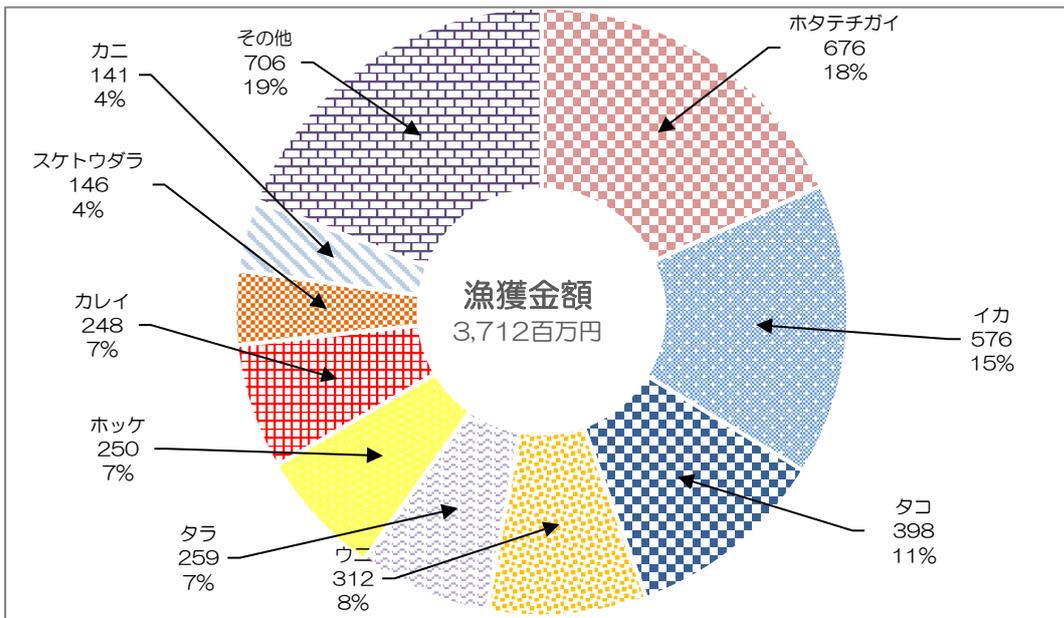


図-5 平成 30 年の魚種別漁獲金額 (資料：小樽市統計書)

昭和 50 年以降の小樽市における漁獲生産高は、漁獲量は昭和 50 年の 7.5 万トン进行ピークに減少傾向にあり、62 年には 3.2 万トンまで落ち込みましたが、その後一時急増し、平成 20 年まで増減の波はあるものの 5 万トン～7 万トン台で推移してきました。平成 21 年以降減少を続け、平成 27 年には昭和 50 年以降の最低となる 1 万トンまで落ち込みました。その後は微増減の波があり、平成 30 年は 1.5 万トンと対前年の 32% 増となっています。

漁獲金額では、平成 3 年の 108 億円进行ピークに、以降減少傾向にあり、近年は 30 億円～40 億円前後で推移してきました。平成 30 年は 37 億円となっており、前年と同額です。(図-6)

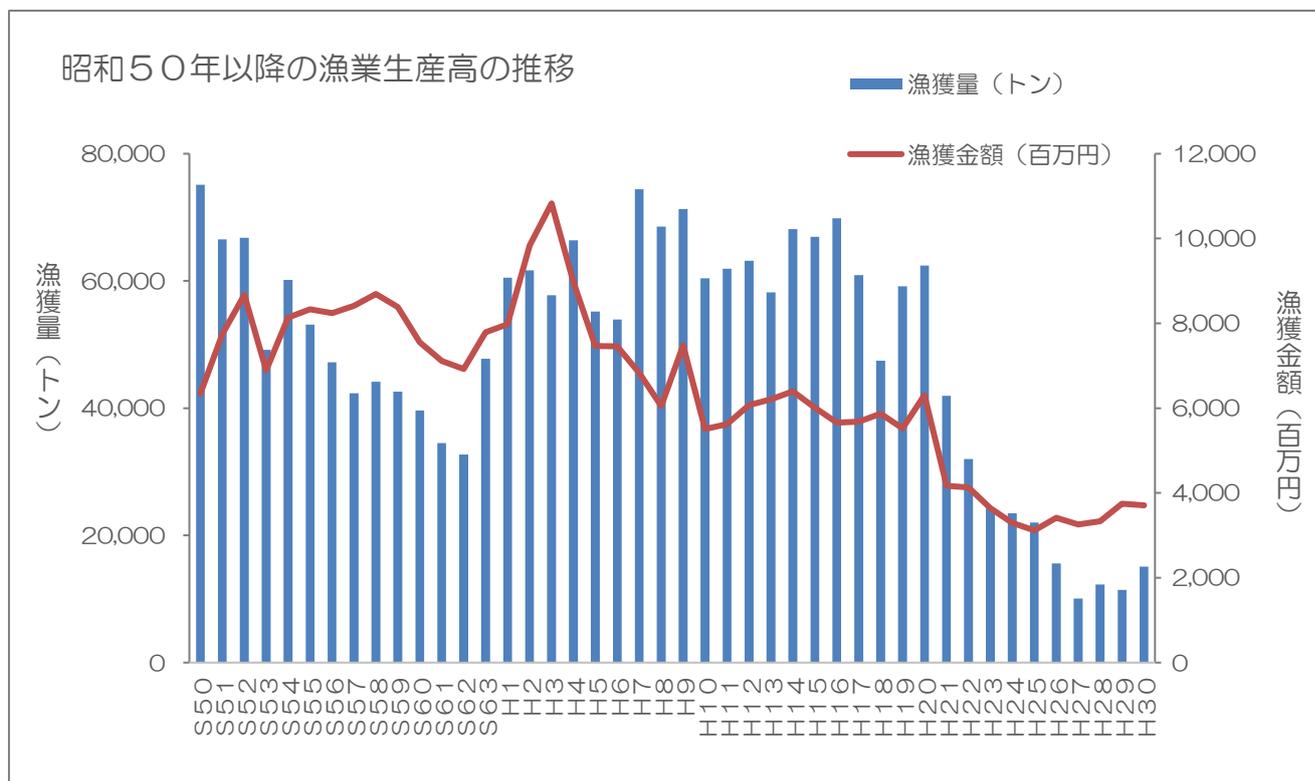


図-6 昭和 50 年以降の漁業生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

(2) 主な漁業種類の生産状況

1) 沖合底びき網漁業

小樽市の沖合底びき網漁業は、日本海北海道沖武蔵堆付近を中心漁場とし、スケトウダラ、ホッケ、カレイ類等を漁獲しています。漁獲量は、平成 20 年まで 4 万トン～6 万トン台で推移してきましたが、平成 21 年以降減少を続け、平成 27 年には 5.5 千トンまで落ち込みました。平成 30 年は 1 万トンで、スケトウダラ、カレイが減少した反面、ホッケが大きく増加したため、対前年の 65%増となっています。

漁獲金額は、平成 3 年の 56 億円をピークに 39 億円～23 億円で推移してきましたが、平成 21 年から減少傾向にあり、平成 29 年には 9 億円台まで落ち込みました。平成 30 年は 14 億円で、対前年の 46%増となっています。(図-7)

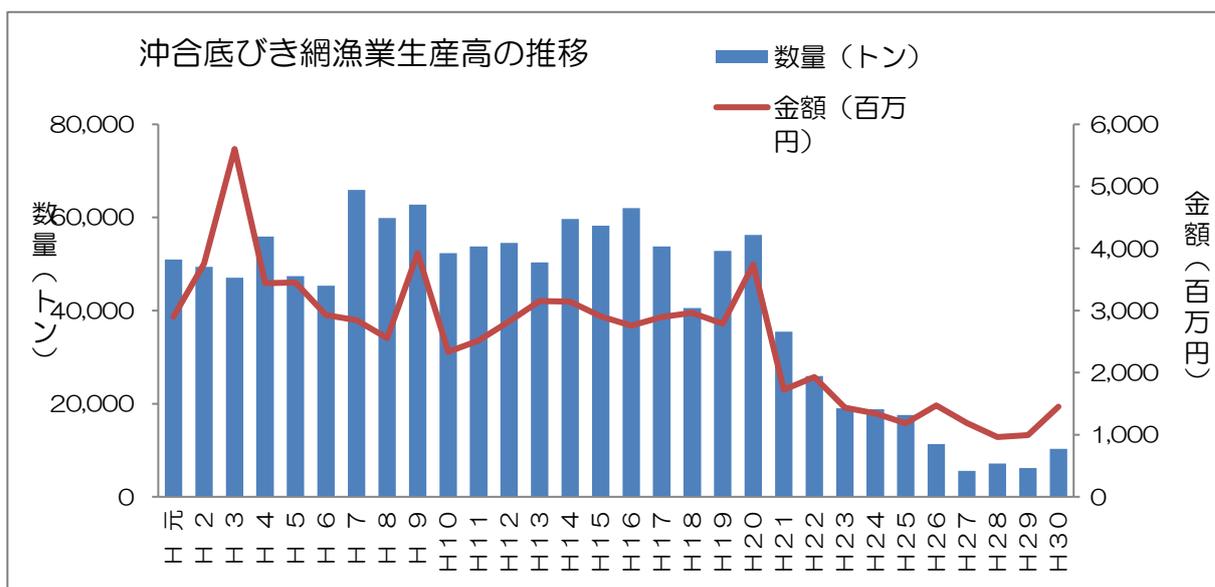


図-7 沖合底びき網漁業の推移 (資料：小樽市統計書)

2) サケ定置網漁業 (サケ)

小樽沿岸のサケ生産高は、平成元年以降、漁獲量は平成 4 年に最低となる 69 トンとなっていますが、平成元年から 200 トン～300 トン台で推移し、平成 14 年には漁獲量で最大となる 700 トンとなりました。平成 15 年は半減しますが、平成 16 年は 600 トンと増加に転じ、それ以降は減少を続け平成 20 年には 81 トンまで落ち込みました。平成 21 年以降は 100 トン～200 トン台で推移しており、平成 30 年は 136 トンで対前年の 20%減となっています。

漁獲金額は、平成 2 年の 1.9 億円をピークに、平成 29 年まで 3 千万円～1.6 億円の幅で大きく増減し推移してきました。平成 30 年は 8 千万円で対前年の 50%減となっています。(図-8)

また、サケやサクラマスは資源維持等のため平成 16 年 (サクラマスは 20 年) から稚魚の放流事業を行っています。(表-3)

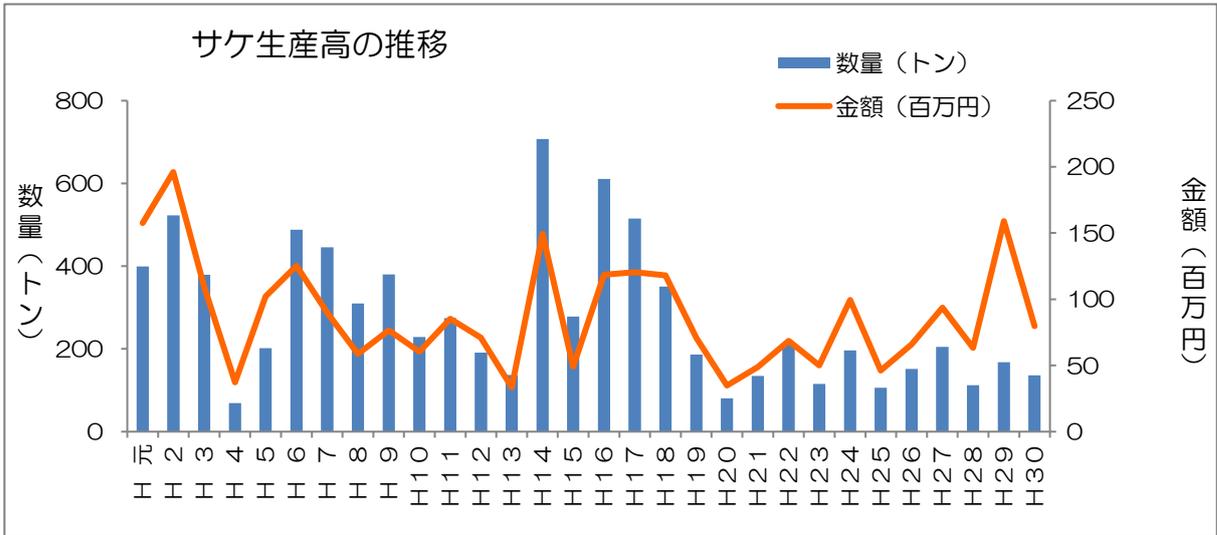


図-8 サケ生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

サケ稚魚放流実績

放流年	放流量
H25	600,000尾
H26	600,000尾
H27	600,000尾
H28	600,000尾
H29	600,000尾
H30	600,000尾

サクラマス稚魚放流実績

放流年	放流量
H25	30,000尾
H26	30,000尾
H27	30,000尾
H28	0尾
H29	15,000尾
H30	0尾

表-3 サケ・サクラマス稚魚放流の直近6年間の実績 (資料：小樽市漁協より報告)

3) ニシン刺し網漁業 (ニシン)

現在漁獲されているニシンは、明治から大正にかけて大量に漁獲があった北海道サハリン系群ではなく、石狩湾周辺を回遊している石狩湾系群となっております。1月～3月頃に産卵のため沿岸に近づくニシンを刺し網により漁獲しています。

北海道日本海側のニシン漁獲量は、低い水準で推移していました。そのため、北海道は日本海地域の漁業振興対策の一環として、ニシン資源の増大を図るため、平成8年度から19年度まで「日本海ニシン資源増大推進プロジェクト」により、ニシンの種苗生産や放流を実施してきました。

平成20年度以降は、生産技術の向上により、事業の安定化が図られたことから「日本海北部ニシン栽培漁業推進委員会」において種苗生産事業を現在も実施しています。

小樽沿岸では、平成15年からニシン稚魚の放流を毎年実施しており、生産高には波があるものの一時期の低水準から回復しています。平成30年の漁獲量は473トンで、前年の2倍となっています。

漁獲金額は1.3億円で、対前年の50%増となっています。(図-9) (表-4)

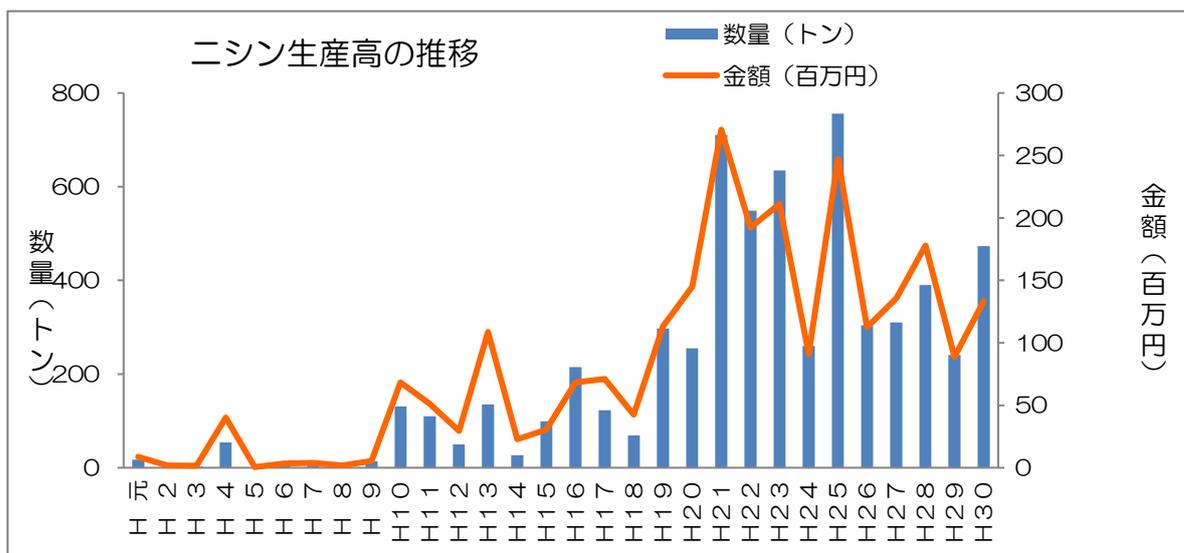


図-9 ニシン生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

放流年	放流量
H25	147,000尾
H26	147,000尾
H27	147,000尾
H28	147,000尾
H29	147,000尾
H30	147,000尾

表-4 ニシン稚魚放流の直近6年間の実績 (資料：小樽市漁協より報告)

4) ホタテガイ養殖漁業 (ホタテガイ)

小樽沿岸のホタテガイ養殖漁業は、祝津地区に区画漁業権を設定して養殖施設を配置し、成貝、稚貝の養殖を行っています。

成貝については、昭和57年の養殖開始当初は、成貝を主として生産しており、漁獲量は急減した平成2年と8年を除き、600トン~800トンで推移していましたが、平成12年から稚貝生産を主に切り替えたことで、その後は30トン~200トンで推移しました。平成25年からは、成貝需要の高まりから生産を拡大し、150トン~400トンを漁獲しています。平成30年は11トンと過去最低で、対前年の95%減となっています。

漁獲金額は、急減した平成8年を除き1.1億円~2.5億円で推移し、平成12年からは漁獲量同様減少しました。平成25年からは、6千万円~1.2億円で推移してきましたが、平成30年は5百万円と対前年の95%減となっています。(図-10)

稚貝については、平成12年にオホーツクや道東方面からの稚貝需要の高まりから、ホタテの主生産を稚貝に切り替えました。以降、漁獲量は増減の波はあるものの1,000トン~2,500トンで推移し増加傾向にあります。平成30年は2,139トンで、対前年の14%減となっています。

漁獲金額は、漁獲量と同様に、平成12年から3億円~10億円で推移し増加傾向にあり、平成29年は過去最高額の10.3億円となりました。平成30年は6.7億円で対前年の35%減となっています。(図-11)

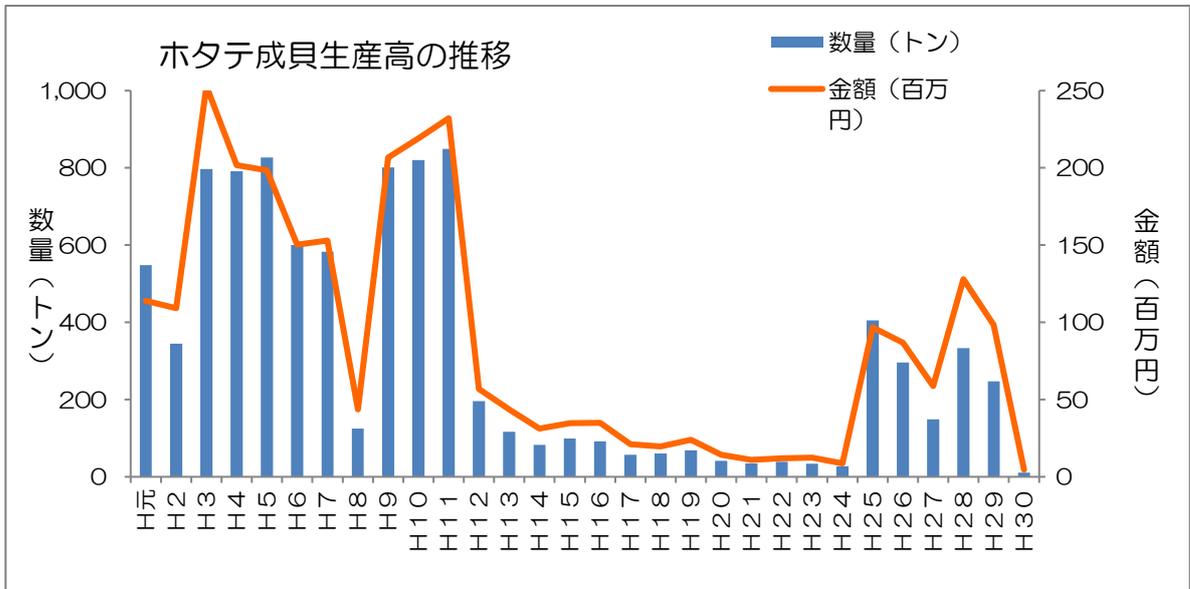


図-10 ホタテ成貝生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

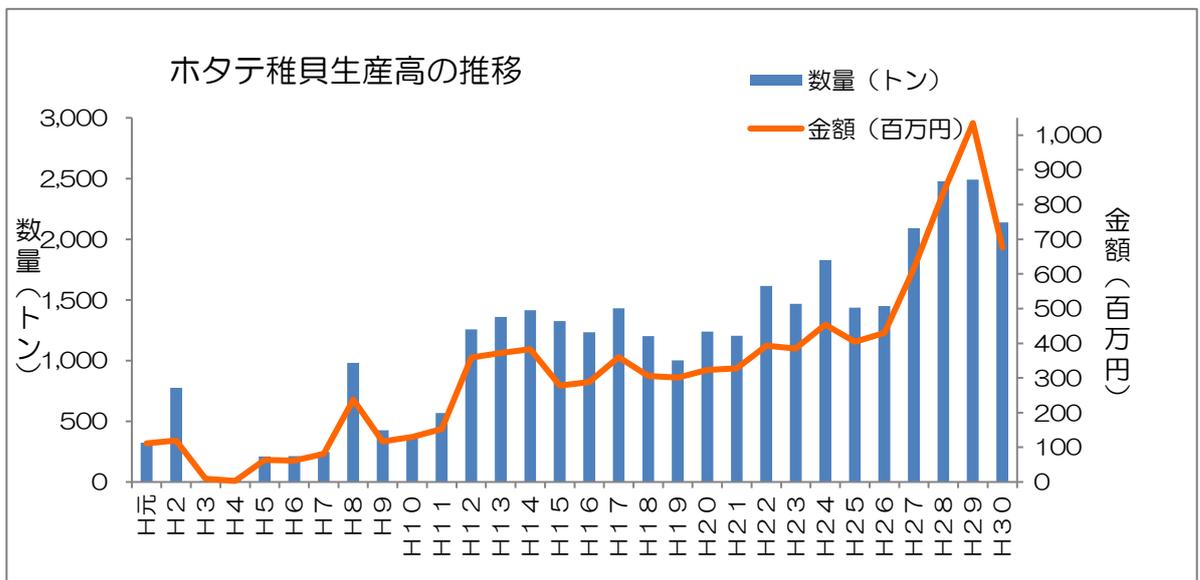


図-11 ホタテ稚貝生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

5) ナマコ漁業 (ナマコ)

北海道産の乾燥ナマコは、中国で高級食材とされているため、需要が大幅に伸び、平成15年から漁獲量が増大しました。平成18年の72トン进行ピークに減少が続き、平成21年には35トンまで落ち込みました。その後は変動が激しく推移しており、平成26年以降減少傾向に転じました。平成30年の漁獲量は20トンで、対前年の26%減となっています。

漁獲金額は、平成15年から増加し、平成18年には2.2億円となりました。以降、1億円~2.8億円を増減しながら推移してきましたが、近年は減少傾向にあります。平成30年は1億円で、対前年の13%減となっています。(図-12)

また、平成27年からマナマコの種苗生産試験や放流を行っており、これまでの試験・研究の結果を生かした、本格的な種苗生産の実施を目指しています。

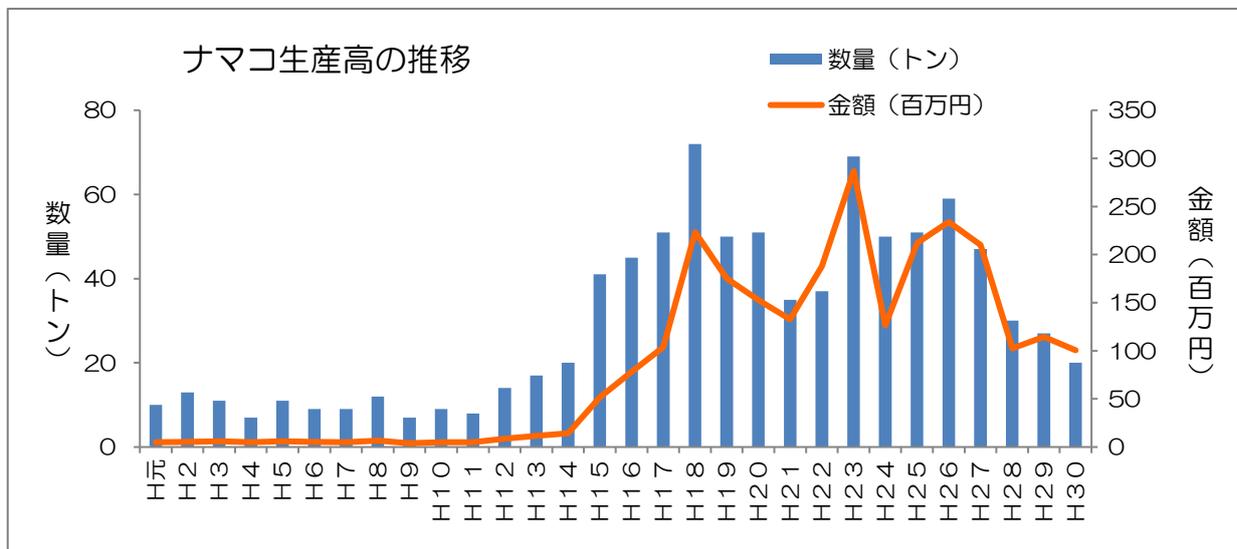


図-12 ナマコ生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

6) シャコ漁業 (シャコ)

小樽沿岸のシャコの漁期は、春4月～6月、秋10月～12月に小樽港沖の水深10m～30mに刺し網を仕掛けて行っており、また、産卵期は春から初夏となっています。

平成元年の漁獲量は86トンでしたが、以降30トン～40トン台で推移しました。平成14年から増加となり、以降50トン～100トン台で推移し、101トンでピークとなった平成26年以降は減少傾向にあります。平成30年は55トンで、対前年の37%減となっています。

漁獲金額は、平成元年の1.6億円から減少傾向にありましたが、平成9年以降は平成25年まで9千万円～1.4億円と比較的安定した推移となっています。平成26年の増加以降は増減があり、平成29年は1.9億円でピークとなりました。平成30年は1.3億円で、対前年の32%減となっています。(図-13)

また、「おたる産しゃこ」の知名度アップとブランド化を目指して、平成20年から「小樽しゃこ祭」が開催され、付加価値向上のほか、観光資源の1つになっています。

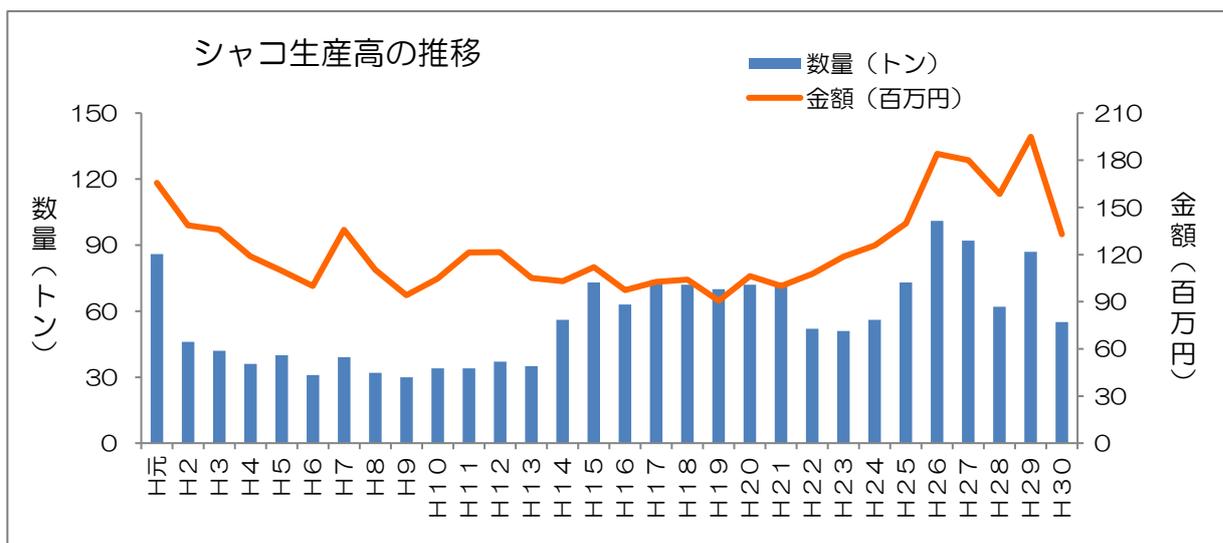


図-13 シャコ生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

7) 採介藻漁業（ウニ、アワビ）

小樽市の採介藻漁業は、全地域で行われています。平成30年末の経営体数（漁業を営む世帯又は事業所）は、ウニが92経営体、アワビが89経営体となっています。

ウニの漁獲量は、平成12年の35トンを経営体数にピークに減少傾向にあり、平成26年の10トンにまで落ち込みました。その後増加傾向にあります。平成30年は17トンで対前年同数です。

漁獲金額は、平成元年の5億円から増減の波はあるものの減少傾向にあり、平成26年の1.8億円まで落ち込みました。平成27年以降は増加傾向にあり、平成30年は3.1億円で対前年の8%増となっています。（図-14）

アワビの漁獲量は、平成20年の8トンを経営体数にピークに減少し、平成22年には2トンまで落ち込みました。その後2トン～4トンで推移し、平成28年は平成元年以降最低となる1トンとなりましたが、以降増加に転じています。平成30年の漁獲量は3トンで、対前年の50%増となっています。

漁獲金額は、平成20年まで2千万円～4千万円を増減しながら推移してきましたが、平成21年以降減少傾向にあり、平成28年は平成元年以降最低の5百万円まで落ち込みました。その後は増加傾向となっており、平成30年は2千万円で、対前年の75%増となっています。（図-15）

また、ウニやアワビは、資源の維持・増大を図るべく、平成16年から種苗放流を行っています。（表-5）

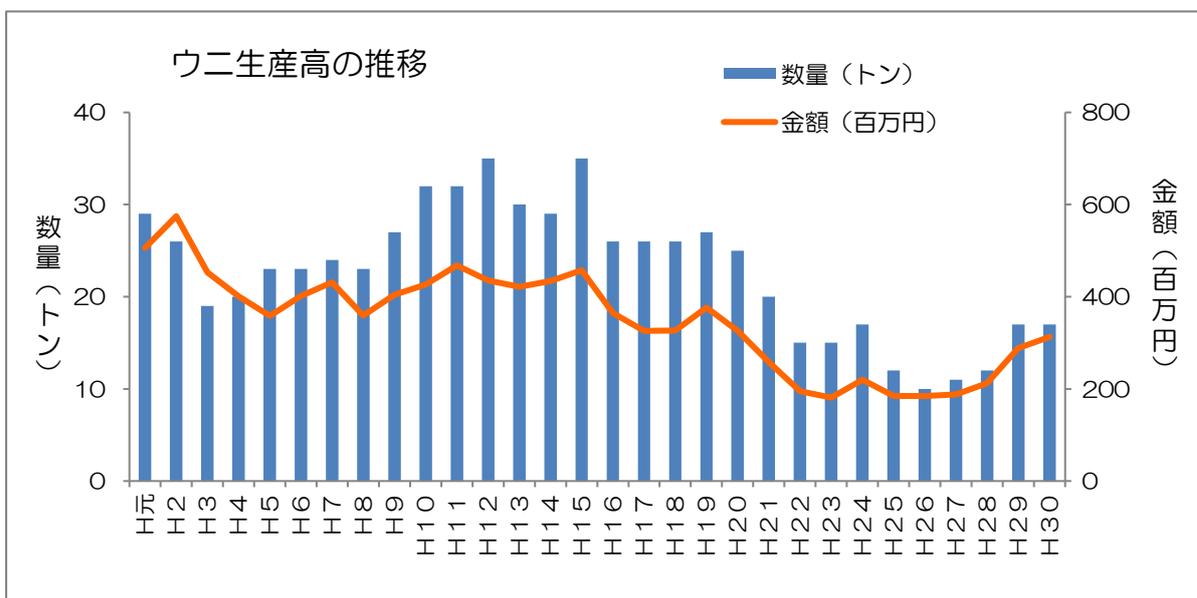


図-14 ウニ生産高の推移（資料：小樽市統計書）

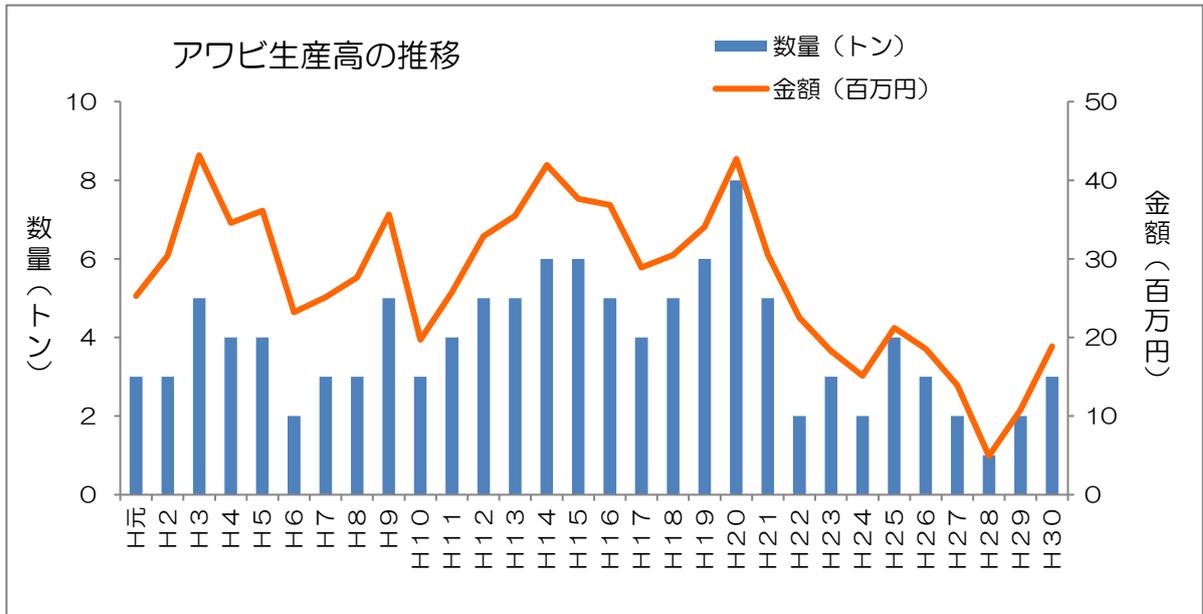


図-15 アワビ生産高の推移 (資料：小樽市統計書)

ウニ種苗放流実績

放流年	放流量
H25	190,000粒
H26	285,000粒
H27	290,000粒
H28	266,000粒
H29	341,000粒
H30	386,500粒

アワビ種苗放流実績

放流年	放流量
H25	17,000粒
H26	10,000粒
H27	10,000粒
H28	17,000粒
H29	24,000粒
H30	31,500粒

表-5 ウニ・アワビ種苗放流実績 (資料：小樽市漁協より報告)

5 漁業協同組合概要

小樽市には、沿岸漁業を主とする小樽市漁業協同組合と沖合底びき網漁業を主とする小樽機船漁業協同組合があります。

小樽市漁業協同組合は、昭和24年9月24日に漁業者、漁業従事者、加工業者1,024人(正組合員895人、准組合員129人)をもって設立。小樽漁業会より財産と業務一切を受け継いで同年10月1日から業務を開始しています。また、昭和41年11月1日に忍路漁業協同組合と合併しています。

小樽機船漁業協同組合は、昭和24年7月19日に小樽機船底曳網漁業協同組合として底びき網漁業者、漁業従事者40人(正組合員40人、准組合員0人)をもって設立し、昭和35年8月16日に改称し、現在に至っています。

○小樽市漁業協同組合 (平成30年12月31日現在)

代表理事組合長 嶋 秀樹 (平成26年1月5日新任)
 専務理事 新川 正己 (平成26年1月5日新任)
 職員数 21名

○小樽機船漁業協同組合 (平成30年6月30日現在)

代表理事組合長 伊藤 保夫 (平成24年6月13日新任)
 専務理事 小川 幸一 (平成24年10月1日新任)
 職員数 16名(他に乗組員14名)

(1) 漁協組合員数

小樽市漁協の組合員数は、平成 30 年末で 169 名となり、平成 25 年との比較では、14 名減少しています。(図-16)

小樽機船漁協の組合員数は、平成 30 年 6 月末時点で 27 名となり、平成 25 年との比較では、3 名減少しています。(図-17)

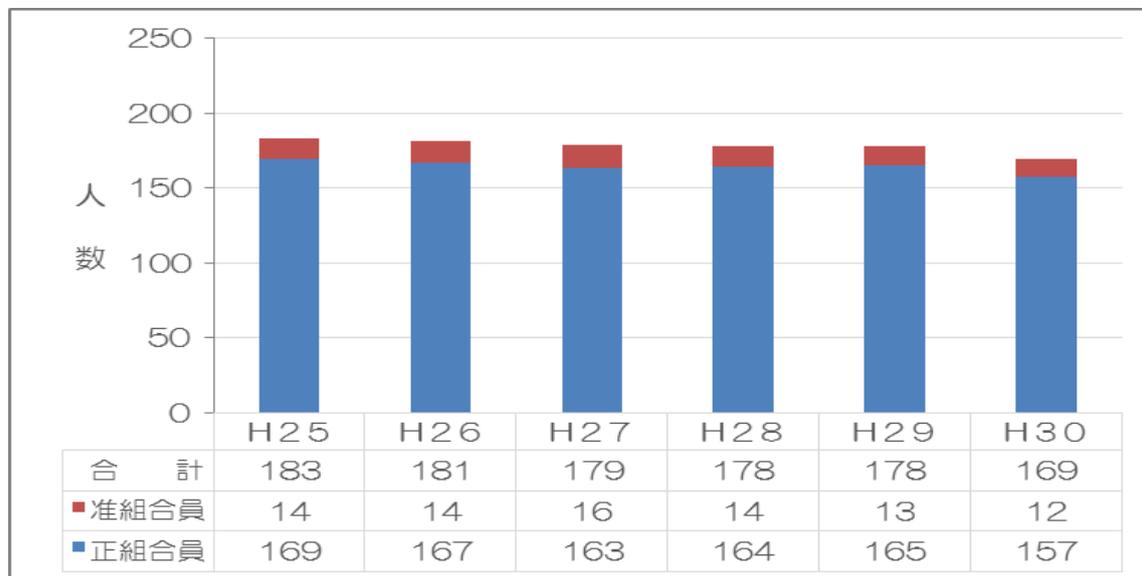


図-16 小樽市漁協組合員数の推移 (資料：小樽市漁協業務報告書)

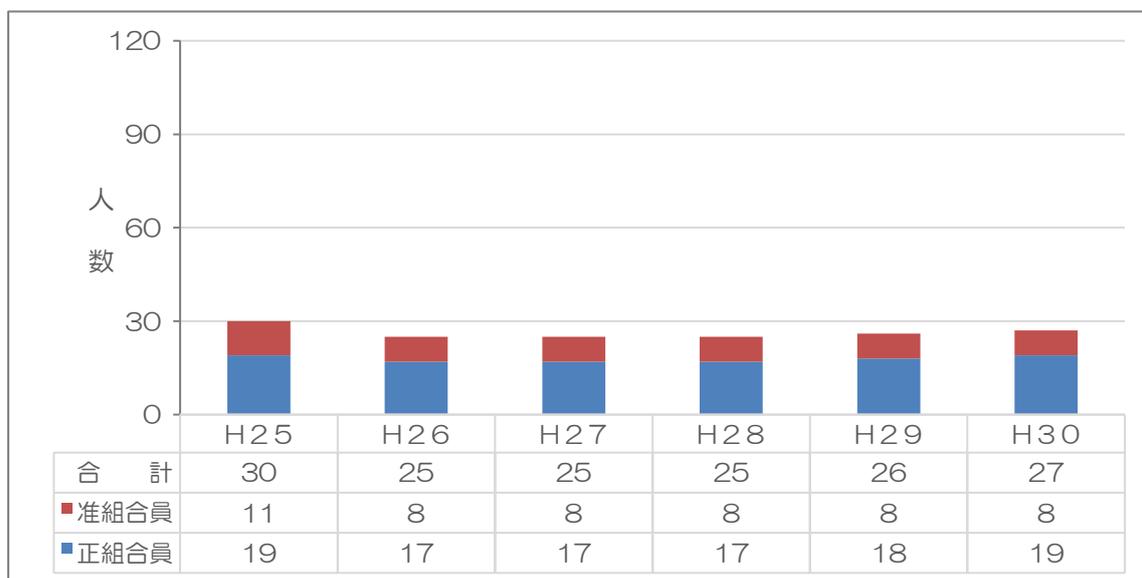


図-17 小樽機船漁協組合員数の推移 (資料：小樽機船漁協業務報告書)

(2) 漁船隻数

小樽市漁協所属の漁船隻数は、平成 30 年は前年と同じく 288 隻、平成 25 年との比較では、22 隻減少しています。

トン数別で見ますと、船外機船が全体の約 86%を占めて圧倒的に多く、続いて3～5 t 未満船で全体の約 9%を占めています。(図-18)

小樽機船漁協所属の漁船隻数は、平成 30 年 6 月末時点で前年と同じ 14 隻となっています。(図-19)

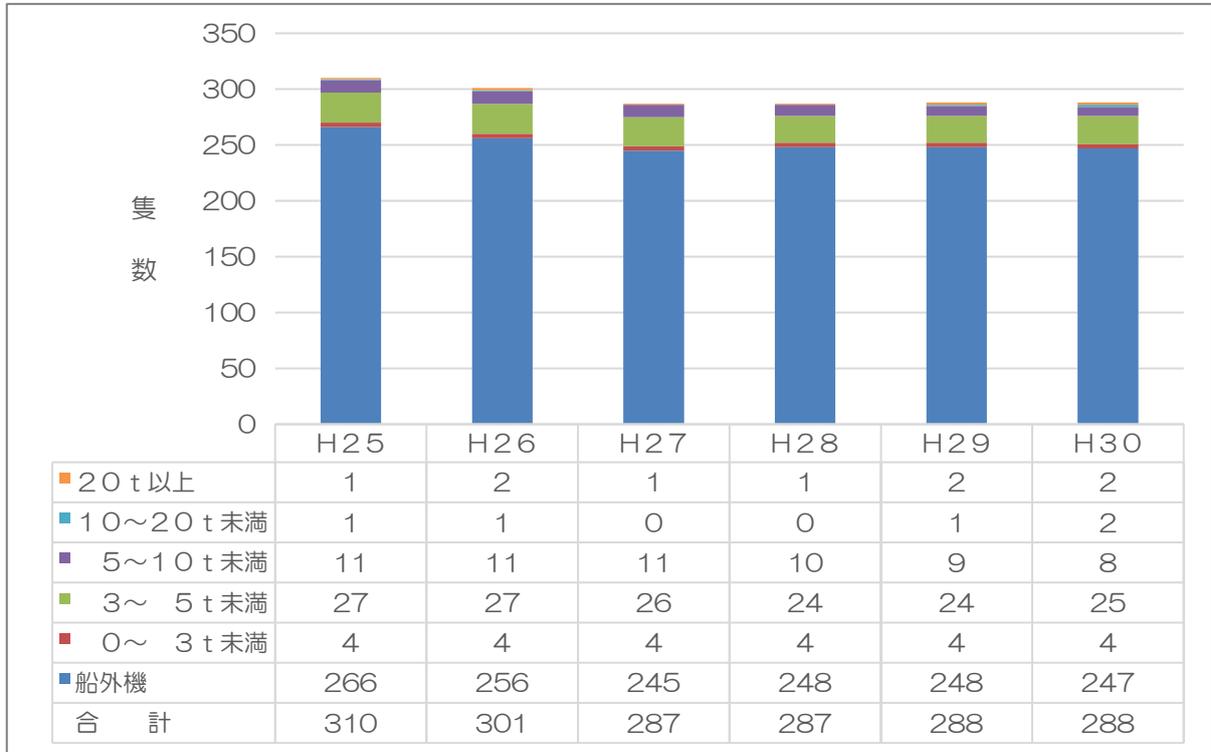


図-18 小樽市漁協の漁船トン数別隻数の推移 (資料：小樽市漁協業務報告書)

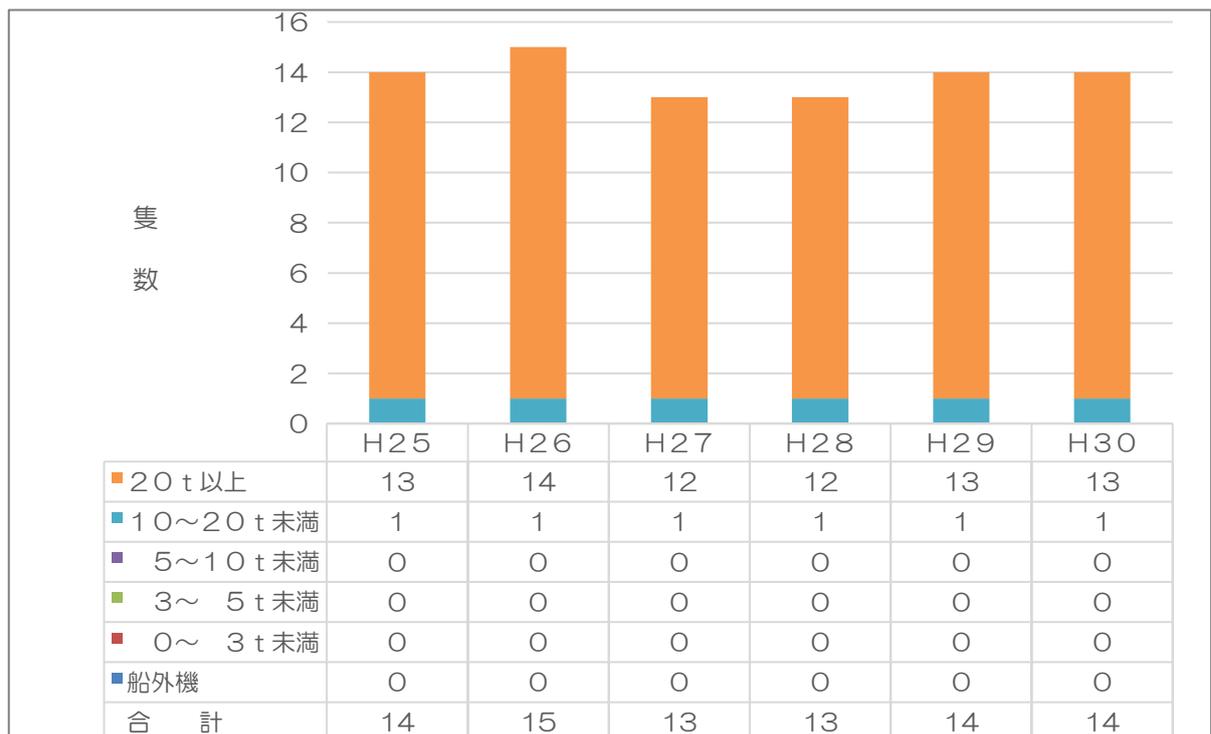


図-19 小樽機船漁協の漁船トン数別隻数の推移 (資料：小樽機船漁協業務報告書)

(3) 漁業種類別経営体数

小樽市漁協の漁業種類別経営体数は、タコいさり漁業が104経営体と最も多く、次いでナマコ漁業101経営体、ウニ漁業92経営体、カレイ刺し網漁業90経営体、アワビ漁業89経営体となっています。

また、生産額の多い漁業種類として、ホタテガイ養殖漁業が7経営体、次いで沖合底びき網漁業1経営体、ウニ漁業92経営体、タコ箱漁業40経営体、ズワイカニカゴ漁業1経営体、シャコ漁業62経営体、ニシン刺し網漁業84経営体となっています。(図-20)

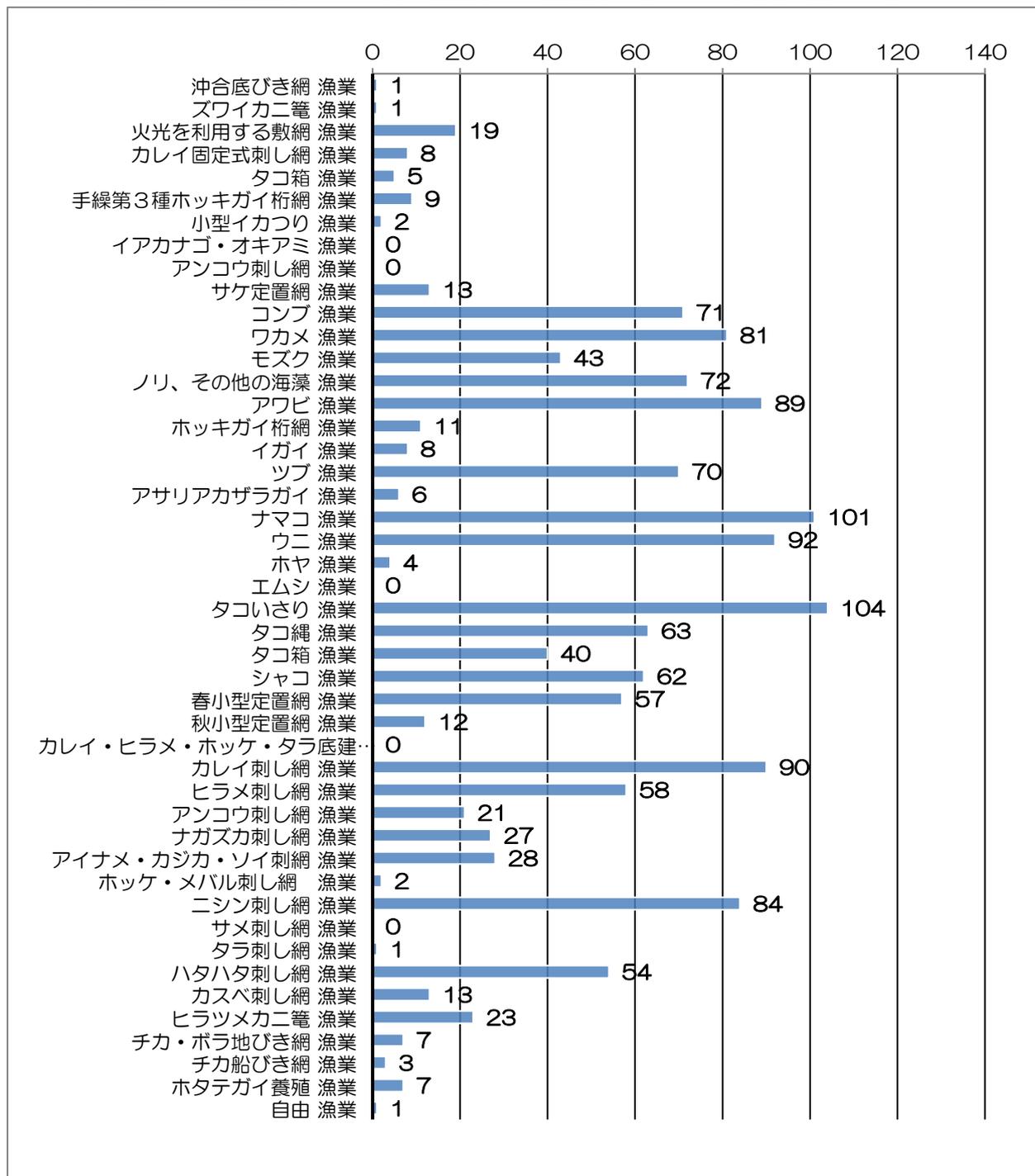


図-20 小樽市漁協の漁業種類別経営体数 (資料: 小樽市漁協業務報告書)

小樽機船漁協の漁業種類別経営体数は、沖合底びき網漁業が9経営体と最も多くなっています。(図-21)

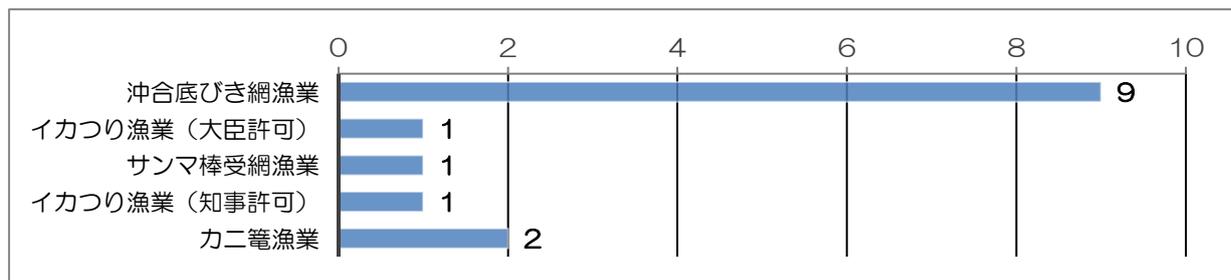


図-21 小樽機船漁協の漁業種類別経営体数(資料:小樽機船漁協業務報告書)

(4) 漁獲金額別経営体数

漁業センサス(5年ごとに行なわれる調査)による漁獲金額別の経営体数の比率をみますと、500万円未満の経営体数は、昭和63年には47%を占めていましたが、平成5年には37%に減少し、以降30%台を推移して、平成25年は40%となっています。

また、1,000万円以上の経営体数は、昭和63年は25%でありましたが、平成5年から徐々に増加し、平成20年には35%となりました。その後、平成25年には減少し、27%となっています。(図-22)

平成25年の全道との比較では、500万円未満及び1,000万円以上の経営体数の比率は、いずれも全道を下回っています。(図-23)

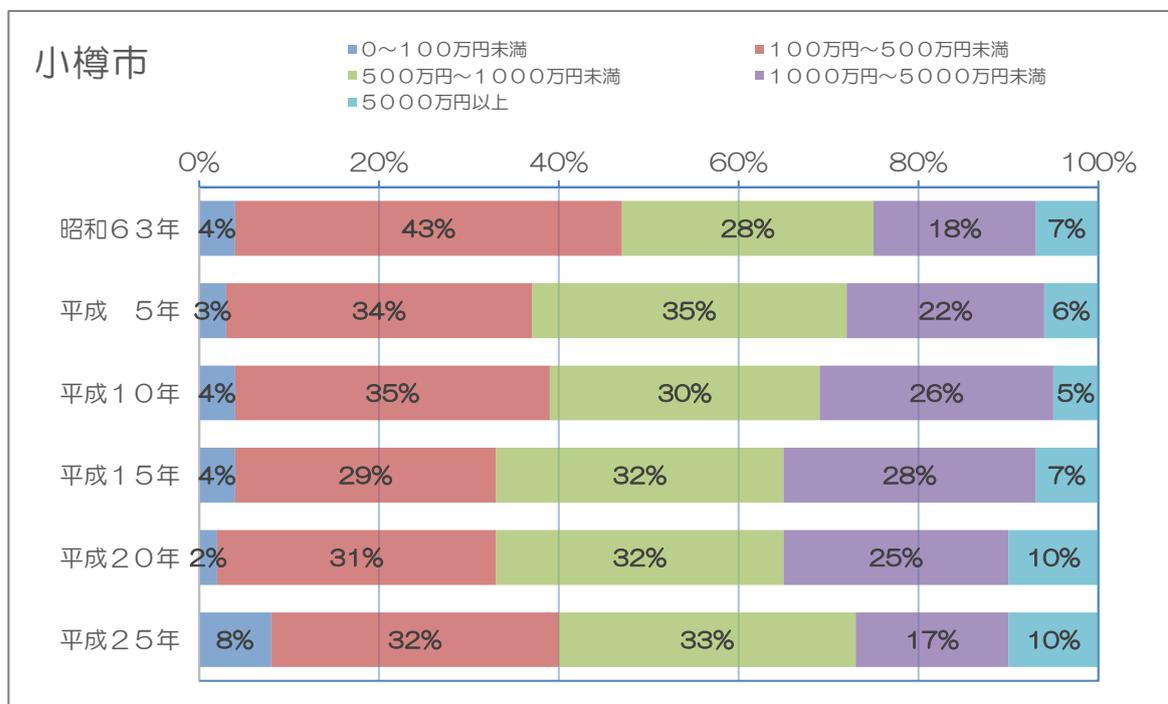


図-22 小樽市の漁獲金額別漁業経営体数比率の推移(資料:漁業センサス)

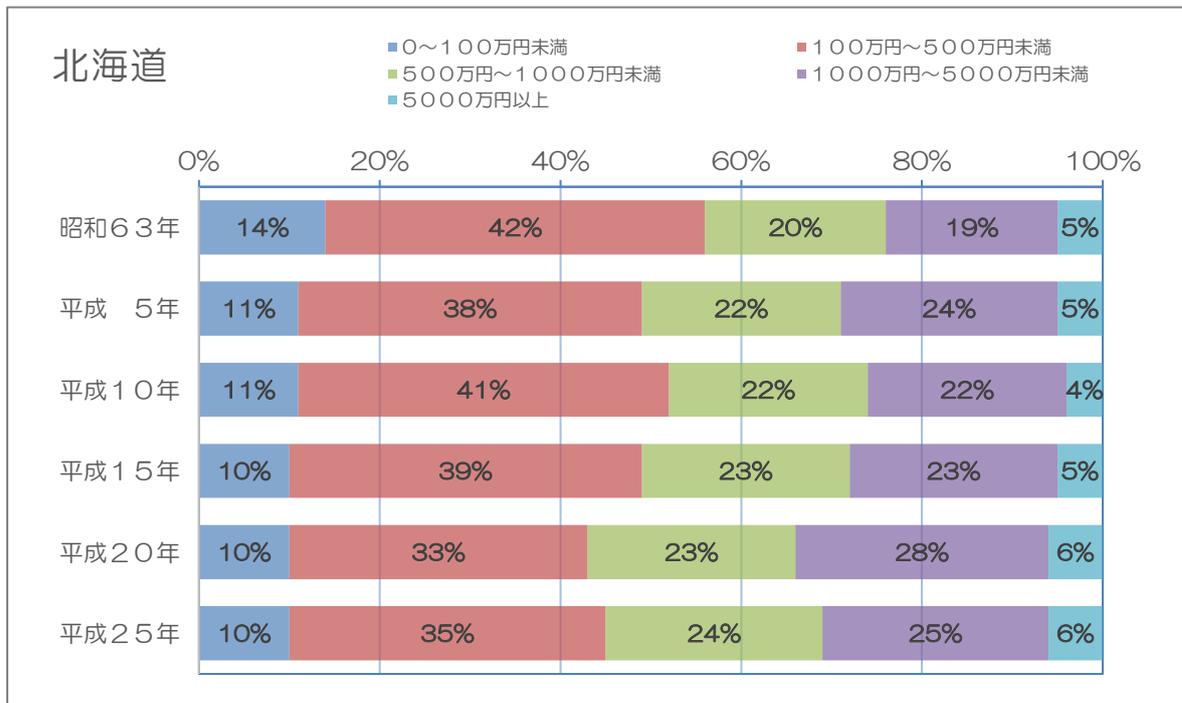


図-23 北海道の漁獲金額別漁業経営体数比率の推移（資料：漁業センサス）

(5) 年齢別漁業就業者数

漁業者の年齢構成をみますと、65歳以上の就業者が年々比率を上げ、平成25年は昭和63年の12%に対して33%にまで上昇しました。また、39歳以下の就業者比率は、昭和63年が17%でしたが、平成25年は21%に上昇しています。このことから、小樽市は漁業者の高齢化が進んでいることがわかります。（図-24）（図-26）

平成25年の全道との対比で見ますと、65歳以上の就業者比率は10ポイント上回っており、39歳以下の就業者比率は5ポイント下回る比率となっています。（図-25）

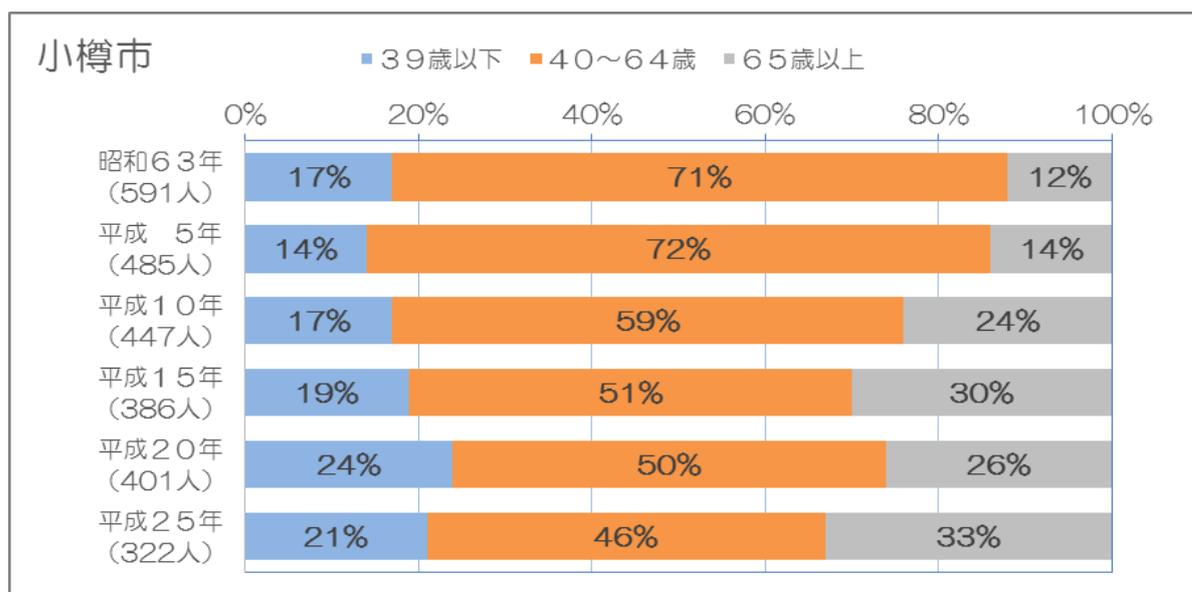


図-24 小樽市の年齢別漁業就業者数比率の推移（資料：漁業センサス）

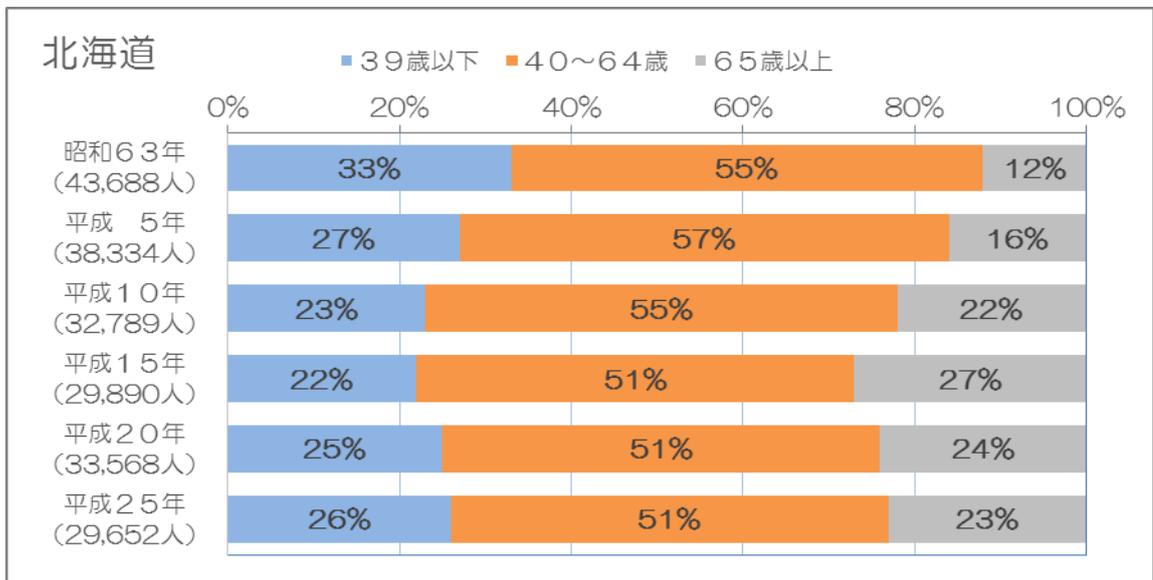


図-25 北海道の年齢別漁業就業者数比率の推移（資料：漁業センサス）

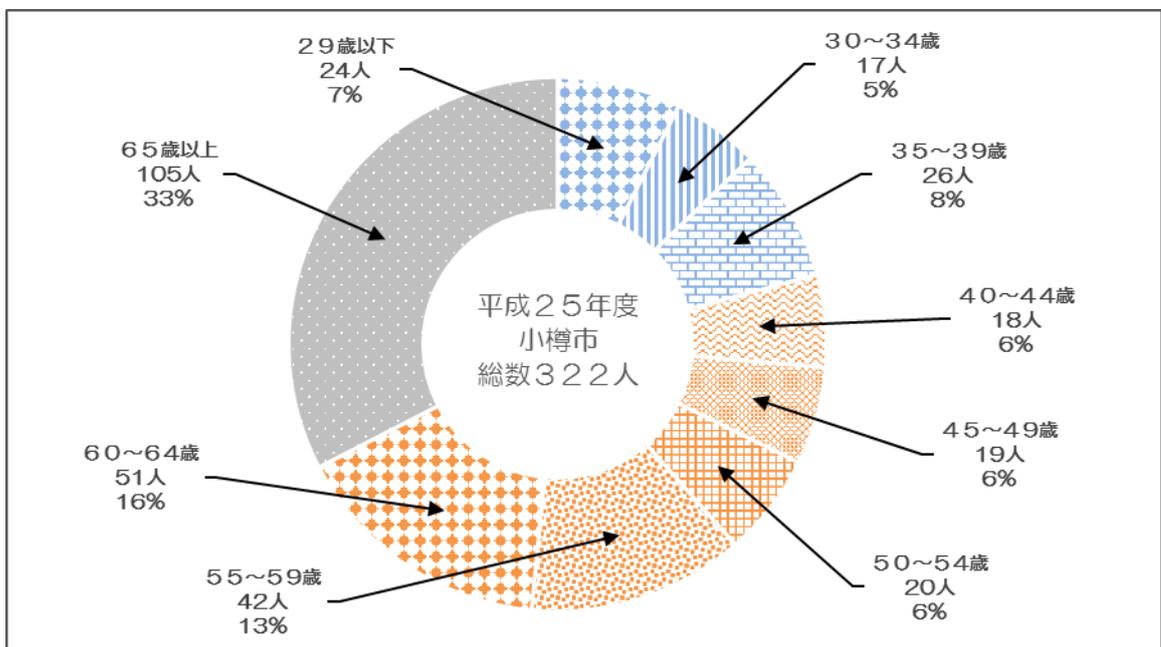


図-26 小樽市の年齢別漁業就業者数比率（資料：平成25年漁業センサス）

(6) 安全操業対策

小樽市及び北海道内において発生している海難事故の状況（表-6）

区分	北海道			小樽市		
	出動回数	死亡	行方不明	出動回数	死亡	行方不明
H25	27	11	7	0	0	0
H26	32	12	7	1	0	0
H27	24	8	2	1	0	0
H28	37	12	0	2	0	0
H29	30	16	3	1	0	0
H30	22	6	3	2	0	0

表-6 海難事故発生状況（資料：(公社)北海道漁船海難防止・水難救済センター）